

令和七年二月

大学院文学研究科

高 夢雨 提出 学位申請論文（課程博士）

『古代東アジアから見た大嘗祭』 審査報告書

國學院大學

高 夢 雨 提 出 博 士 学 位 申 請 論 文 (課 程 博 士)

『古代東アジアから見た大嘗祭』 審査報告書

論文内容の要旨

本論文は、大嘗祭及びその周辺の祭祀儀礼を中国などの東アジア諸国の祭祀信仰と比較し、大嘗祭の源流と本義、成立と発展の背景を考察しようとするものである。全体の構成は、序章につづき、多面的に大嘗祭を分析した八章と、全体をまとめた終章からなる。

序章では、古代東アジア世界の秩序と信仰に関する先行研究の方向性を把握したのち、東アジア的視点による神祇祭祀論の欠如を指摘し、本研究の主な比較対象である、東アジア文化圏の中心——中国の国家的祭祀信仰について、両漢交替期に成立した礼制的国家祭祀の根本指針である儒教經典に見る祭祀理念や、唐代までの国家祭祀の展開と特徴を概観する。

第一章「古代日中の嘗祭―天子宗廟祭祀と大嘗祭の祭儀比較―」では、『礼記』における「嘗」の考察を前提として、日本の大嘗祭・新嘗祭の名称の由来を再検討。献饌の儀を中心に天皇の大嘗・新嘗と天子の嘗との祭儀比較を試み、両者の関係を考察する。中国の宗廟で行う時祭や薦新行事の嘗の形式とその祖先祭祀の意義を確認し、その名称を借用した日本の大嘗・新嘗の成立には、中国の宗廟祭祀の影響があったと指摘する。

第二章「天子の宗廟と大嘗宮・神嘉殿の比較考察」では、中国の祖先祭祀と日本の天皇祭祀における祭祀施設を比較検討し、日中交流の視点から大嘗祭の原形と本質について考察する。大嘗宮・神嘉殿は区画・遮蔽された東西対称の建物であり、そこで如在の礼が行われ、祖先・祖神を饗応する場としての共通性を持つ。そこには、三・六世紀、中国・朝鮮半島から伝来した祖先意識、宗廟・陵寢祭祀の影響が確認でき、祖先・死者への饗応の形態は大嘗祭の原形――新嘗・古墳儀礼として成立。七世紀中頃以降には、唐の律令制度を導入、これに対応する宮都の構造、建築の様式と儀礼が整備され、そこで古代の大嘗

宮と大嘗祭が成立したと推測する。

第三章「標山の源流の再検討」では、大嘗祭における標山の源流と性格について中国の版位や散樂の山車と比較し、八世紀以降、大嘗祭における中国文化の受容を考察する。大嘗祭における国標は、九世紀前半までに、木綿をつけた櫛という神事に使われる伝統的な標の上に、中国の散樂の山車を新たに導入、実用性と観賞性を兼ねた標山の形とし、節会・宴会における散樂の樂標として使われたことを指摘する。

第四章「大嘗祭前後の禊祓と鎮魂について」では、大嘗祭前後の御禊・大祓・鎮魂について、中国の禊祓と招魂・鎮魂に関する觀念と齋行状況とを比較考察し、両祭儀の関連性と信仰面と歴史的な意義を検討する。中国では死者の葬送・祭祀・蘇生と生者の延命に「招魂」を用いる。他方、日本では生者の健全・安泰を祈るため道教的な「鎮魂」の語を用いた。古代日本では中国の儒教的な魂魄観は完全に受け入れていたとは考えられず、鎮魂祭を行う意図は本来、禊祓と同じように祟りの解除にあったと指摘。天皇が大嘗祭を親祭する前の禊祓と

鎮魂は、祭祀者の罪を除き、祟りを回避し、健全・清浄な状態に回復・維持する、広義の斎戒・潔斎の役割を持つと指摘する。

第五章「崇・卜・斎・祭の構造」では、大嘗祭における祟りと高い潔斎意識について、古代日中の卜占・祭祀の構造・斎戒を比較考察し、祭祀観の異同を検討する。中国の卜占には、王権・社会の安定を保証するために人間が定めた礼制として行う教化的な意図がある。他方、日本の卜占は、それで得た神意により清浄な時空間で祭祀を行い、神の祟りを回避する手段との役割をもつ。また、中国の人間側からの単方向的な斎戒は、神明に通じるために祭祀者の心身状態を次第に整える目的であるのに対し、神の意志を意識した日本の対称的・重層的な斎戒は、清浄な祭祀者が清浄な時空間で祭祀を実施するためのものと位置づける。中国の祭祀・斎戒の観念に見る、先王の礼制を重んじる礼本位は、日本の神本位の思惟とは違っていたことを論証する。

第六章「古代日中祭祀に見る神の見立てと如在の礼」では、古代日本で受容されなかった「神主」「戸」「降神の儀」などについて考察し、日中の神観・祭

祀観の異同を検討する。中国では神座・神主などを設け、神の代わりに饗応を受ける戸を立て、さらに音楽や裸礼で降神を行う。人間が祭祀を主導し、また祭祀を通して人間関係・社会秩序を再確認する意図が認められる。一方の日本では、これらは導入されず、神の祟りを回避するため神の意志を重視し、人間が神を招致したり演じたりする作法はなかったことを指摘する。

第七章「古代東アジアにおける王権と祖先祭祀」では、古代東アジアにおける王権と死者・祖先への祭祀・信仰の異同を考察し、東アジア世界の秩序の視点からその背景を考察する。死者・祖先に対する祭祀行為の近似性には、人間の認知レベルの共通性、四・五世紀前後における中国知識層の渡来、七世紀における隋唐の制度・文化の導入などの影響が推測される。七世紀の唐帝国の影響下、朝鮮半島の統一新羅と日本はともに律令制度を導入した。統一新羅は諸侯として中国に臣従、中国の宗廟祭祀を含む祭祀体系を整備したのに対し、日本は独自に中国との関係を維持し、古墳時代以来の祭祀伝統を踏まえ、皇祖神祭祀をはじめとした祖先祭祀を行ったことを指摘する。

第八章「大嘗祭と古代の天子・天下観——中国の郊廟祭祀と比較して——」では、中国など北東アジアの諸民族と比較し、古代日本の天子・天下観にもとづき、大嘗祭の意義を再検討している。日本は、中国の天命観や天への郊祀の原理を把握していたものの、それを天皇の本質とはしなかったもので、これを制度的に位置付けなかった。天皇は皇祖天神の系譜を引いた皇孫・天子として、大嘗祭（新嘗・神今食）を親祭し皇祖神に報い、諸国大祓や由加物の献上など、天下諸国に助祭・協力させることで「治天下大王・天皇」の概念を具現化した。大嘗祭は大王・天皇の祖神祭祀として成立し、王権の出自と継承を実証する儀礼として行われ、同時に、律令祭祀制度下では他の天神地祇祭祀とともに、天皇の天下統治による国内の安定を保証する意義を持つことを指摘する。

終章「東アジアから見た古代の国家祭祀」では、各章の論点をまとめ、今後の研究の展望として、大嘗祭をはじめとした古代日本の国家的神祇祭祀の体制と性質や、祭儀・祭料の更なる比較考察について見通しを立てている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、『周礼』『礼記』などの漢籍・中国文献に記された祖廟祭祀と、古代日本の大嘗祭とを厳格な漢籍の解釈にもとづき詳細に比較・検討し、日中の神・祭祀観の相違と背景にまで言及したものである。従来、大嘗祭の研究は、神道の祭祀学、民俗学、歴史学など、日本国内の視点では多面的な研究は多く行われてきた。しかし、東アジアの視点で中国の漢籍と比較した研究は、現在においても極めて限定的である。このような現在までの研究史・研究状況を鑑みると、本論文の研究上の意義は大きいと評価できるだろう。

個別の内容としては、まず、『礼記』『周礼』の宗廟祭祀の構造（祭式）を『大唐開元礼』などで補足して、祭祀の場の構造・構成と対応させて整理・理解し、大嘗祭の大嘗宮・祭式と比較・整理した点は、神観・祖霊観を客観的に比較する上で大きな意味をもつ。その結果、導きだされた「中国の礼本位と日本の神本位」という日中の祭祀観の整理は明快で、今後の祭祀研究の重要な指針を提

示したといえるだろう。

卜占と祭祀の関係の指摘も重要である。古代中国では、天子の天下統治を確認するための卜占と宗廟祭祀であり、一方の日本では神意を確認する卜占と、その結果に左右される神祇・祖神祭祀となる。古代中国と日本では、神・祖霊観は大きく異なっていたことを、卜占・祭祀の構造分析から明確にした点は大きな成果である。現在でも、古墳時代を含めた古代日本の神・霊魂観を復元するため、単純に『礼記』などの記述を当てはめる研究は少なからずある。しかし、本研究が示すように、日中の神・霊魂観と祭祀構造は大きく性格が異なると考えると、このような研究方法には慎重にならざるを得ない。例えば、中国の祖廟祭祀に認められる降神の神観は、民俗学の依代論や近代神道の神観とも関係する。「天降る」という神観は、日本の古代以来の伝統的なものではなく、その形成プロセスを厳格な資・史料にもとづき歴史的にたどる必要性を本研究は示唆している。

標の山の原形と鎮魂祭の性格に関する章は、中国との比較と具体的な資料に

基づき、新たな視点を示した好論である。そこで示された標の山の機能・性格は、後の祭礼における様々な造り物の問題にもつながり、民俗学的な分析への応用が可能だろう。鎮魂祭と祓・禊との関係性の指摘は、日本における祓・禊の本質を検討するうえで重要な方向性を与えているといえよう。

一方で課題も多くある。個別にふれておきたい。まず、「嘗」字を用いるようになった経緯について考究するのであれば、日本における漢籍輸入と、その継受の歴史との整合性について考慮する必要がある。『礼記』（王制・月令・祭統）が「嘗」字の由来であることは誤りないと思われるが、実際に七・八世紀当時、日本での「嘗」字の解釈には、それまでの歴代王朝の「嘗」に対する理解が影響した可能性はある。この点について、さらに厳密な確認・論証は必要だろう。

中国の宗廟祭祀と日本の新嘗・大嘗祭は祖先をまつるという意味で確かに共通性はある。ただし、大嘗祭では天皇が自らの皇祖神をまつり、中国王朝の宗廟祭祀では、皇帝が受命の祖先とその継承者である祖先をまつる。日本の天皇

は祖先の「神」、中国王朝の皇帝は受命の人霊（歴代皇帝）という決定的な違いがある点を等閑視してはならない。律令都城制導入にあわせて、建築様式と儀礼が整備され、大嘗宮・大嘗祭が成立していく際に、古代の日本が、中国王朝の「宗廟（太廟）」制度を継受しなかった理由はこの点にあったと理解すべきである。

日本の神祇令が規定する恒例祭祀は、公的・外廷的な祭祀と天皇家の内廷的な祭祀に分類ができ、大嘗祭は後者の典型となる。そして、新嘗・大嘗祭は八世紀から九世紀に変化した。大嘗祭における皇族・官人の関与形態などを含め、八・九世紀の律令制度の変質過程のなかで新嘗・大嘗祭の性格を考えることで、中国王朝の宗廟祭祀との性格や背景の差異が明確化すると考えられる。

また、七世紀以前で日中比較をする場合の根本的な問題点として、そもそも中国の諸王朝における祭祀儀礼の状況についてはいまだ不明・未解明な点が多く、比較が困難な点がある。日中の祭祀儀礼を比較検討する際、『礼記』や『開元礼』が史料として参照されることが多い。しかし、この二書は、理想の礼制

の机上論を文章化したものであり、実際に行われた祭祀を記録したものではない。漢代以後の各時代の王朝礼制の実態については、現在、研究が進展しており、その最新の成果を参照し、中国王朝礼制の机上論や実例を、日本は、何時、如何なる理由で受け入れたのか、または受け入れなかったのか、という視点でも研究を行う必要がある。

あわせて、前近代中国の歴代王朝礼制については、儒者によって天命思想が持ち込まれた前漢時代と、礼典と法典とが合わせて編纂されるようになった西晋時代に画期がある。樂制についても同様であるが、当該時期（漢代～唐代）の樂制については、まだ不明な点が多い。今後の検討では、まず日本における展開を正確に跡付け、判明するところの中国の事例と比較するという手順が必要となろう。

最後に、日中の神・祖靈觀、祭祀構造の相違は、何に起因するのか。やはり理論的な説明は、まだ充分ではない。これを明らかにするには、日中の氏族集団や社会構造の比較が必要である。さらに、仏教・道教も含めた日中の宗教史

の包括的な評価は不可欠だろう。今後、社会構造と信仰との相関関係の究明を視野に入れ研究を継続してもらいたい。それは、現代も含めた東アジアの地域間相互の文化的な理解につながり、対立を相対化できる貴重な指針を示すものとなるだろう。

こうした問題点もあるものの、短期間で多くの新視点を含む充実した博士論文を書き上げたこと自体、高い評価に値する。今後も研究を継続し大成されることを強く希望する。よって、本論文の執筆者高夢雨は、博士（神道学）の学位を授与される資格があると認める。

令和七年二月十七日

主査	國學院大學教授	笹生 衛	印
副査	國學院大學准教授	江川 式部	印
副査	國學院大學名誉教授	岡田 莊司	印